

サルトルの政治思想(一)

予備的考察

——とりわけ言葉の位置について——

言うまでもなくサルトルは、政治家でもなく政治学者でもない。政党に加盟したこともなければ、体系的な政治の理論を打ちたてているわけでもない。したがって、彼を政治の専門家とみなすことはできないし、「サルトルの政治思想」という言い方も適当ではないかもしれない。

とはいふもののサルトルは、ここ三十年來、人びとが政治と呼ぶものにある形で積極的にかかわってきたし、ある形で政治を語ることをやめなかった。本論は、サルトルにおけるこのある形での政治の軌跡を描き出そうと

する試みである。

軌跡という言葉は便利な言葉である。だがそれだけに抜け穴の多い言葉でもある。それは一種の抽象化を想定するだけでなく、常に何かの軌跡として、その何かを自明のこととして設定してしまう。ところでいま、ある形で、と書かざるを得なかったように、サルトルにおける政治とは、私にはそれほど自明のこととは思われない。たしかに、常識的には、文学—哲学—政治という三つの言葉によってサルトルの表現活動の全体を網羅することはできるし、すべてのテキストをこの三種に分類してみることさえできよう。だがそこから、政治的なテキストを切り離してそれ自体として整理をし、一箇の体系的なオブジェを浮きあがらせてみても、これに〈政治思想〉

海老坂 武

という名を与えることができるとは思われないのである。

というのも、サルトルにあっては、複数の言語表現を試みる思想家においてしばしばそうであるように、政治(文学、哲学)は彼の活動の一部としてあるのではなく、またむしろ活動そのものでもなく、全体としての活動を形成しつつ同時にその一つの表現となっているからである。言いかえれば、文学も哲学も政治もお互いに密接にからみあいつつ、サルトルという一人の人間の全表現活動を創り、かつそれぞれの形でこれを実現しているのである。このからみあいの軸、あるいは、この全体的活動の核に、私はヘアンガジュマン(engagement)という言葉置いて考えてみたい。ヘアンガジュマンの意味内容は時代とともに微妙に変化してきたが、それが一貫してサルトルの活動を核心において指し示す重要な言葉としてあることに変わりはない。言いかえれば、それはサルトルの全活動によって定義される言葉としてもあるのだ。

以上がサルトルにおける政治を考えるにさいしての私の基本的な視点であり、この視点からするならば、政治の

軌跡を描き出そうとする試みは、同時に、中心にある未分化の、全体としてのヘアンガジュマンを明るみに出す作業へと通じていかねばなるまい。文学、哲学から切り離された、ないしはこれと並置された政治ではなく、政治的言語の中に対象化された一箇の全体的活動が問題なのである。とするならば、政治的行動の記録、政治的理論の要約を提出するだけでは不十分で、政治という言葉がヘアンガジュマンにたいして位置づけられねばならないだろう。サルトルにおける政治への位置どりの軌跡が問われねばならないだろう。この作業のうちに私自身はヘ政治的なものへの問い返しをこめたいと思ってい

第一章 戦後の出発

一九四五年十月に、レ・タン・モデルヌ誌が創刊されたとき、雑誌の指導的理念ないしは綱領といったものはほとんど定式化されていなかった。多くの協力者たちにとって雑誌の創立は、レジスタンスを通じて形成された仲間意識の再確認であり、戦後世界の中の各人の実験の場、模索の形式にすぎなかった。それでもなお、雑誌

の基本方針として言葉になしうる最大公約数を求めるとすれば、「現在のできるかぎり完全で忠実な解説⁽¹⁾」というメルローロポンティの一句がもっともふさわしかったであろう。発足当時の編集委員会にはジャン・ポーランやレイモン・アロンが名を連ねているし、創刊号にはジャン・カナバやボリス・ヴィアンの一文が載せられている。つまり、やや距離を置いた時点から便宜的な分類をすれば、近代化論者のチャンピオンから教条主義的スターリニストまで、文壇の大ボスから「ヘアプレ・ゲール」の旗手までの同舟する、奇妙な出帆だったのである。

しかし、このイデオロギーの未分化、惰性的共存——それは現実社会の流動性、多義性を映し出していたに違いないのだが——から出発したレ・タン・モデルヌ誌が、これより数ヶ月前に再刊されていたエマニュエル・ムニエのエスプリ誌と並んで、一つの方向性を帯びた運動として世人の目に映じたとしたなら——この雑誌は「実存主義」の機関誌として受けとめられた——その主たる理由は、創刊号の巻頭におかれたサルトルの「レ・タン・モデルヌ誌紹介の辞」、とりわけここに高く掲げられた「ヘアングジュマン」宣言のうちに求められる。内容的に

みるなら必ずしも密度の高い文章とは言えないが、緊迫感のこもったアピール（「われわれは、われわれの時代の何ものをも失いたくはない。もっとよい時代はあるかもしれないが、これはわれわれの時代なのだ。われわれはこの戦争、おそらくはこの革命のただなかに、この生を生きるよりはかないのである⁽²⁾」）のうちに、戦争と占領という「暗い谷間」をくぐり抜けて、いま戦後の新たな出発を志す者のなまの声を人びとは聞き取り、これを分け持ったに違いない。

ところでこの「ヘアングジュマン」宣言は、芸術の無償性、無私性の上にあぐらをかく芸術のための芸術の理論やリアリズムの理論の弾効に、さらには分析精神の代表者として選ばれたブルーストへの批判にかなりのページをさいているが、論理構造にのみ目をとめるなら次の二つのポイントにすっきりと整理されるはずである。

第一のポイントは、作家の責任ということの断固たる指摘——決意である。作家は時代の中に、「状況の中に」(en situation) いる。何をしても彼は「捲き込まれて」(dans le coup) おり、そこでは言葉も沈黙もすべて意味を持ってしまふ。逃れるすべがない以上、時代と一つ

になり、時代にたいして意志的に責任を引き受けようではないか……

第二のポイントは、ブルジョア思想の指導原理である分析精神にたいする批判と、これに対抗する全体的人間観の呈示である。社会は同一の人間本性を持つ個人の総和ではなく、われわれは「グリーンピースの鐘詰の中の一粒のグリーンピース」⁽³⁾のように世界の中に並存しているのではない。人間はそれぞれ分解しがたい全体的存在 (totalités indecomposables) である。世界全体にたいして状況づけられていると同時に、その状況の中で自由に自分を選ぶことによって世界全体を表わし示し (manifestester)、状況に意味を与えている。そのかぎりにおいて「一人の人間は全地球である。人間はいたるところにあり、いたるところで行動し、一切にたいして責任がある」⁽⁴⁾…… (傍点引用者)

ここで明らかになるのだが、サルトルは作家の責任性を全体的人間観から切り離して考えているわけではない。それどころか、理論的には後者のうちに前者の根拠を置いてある、と見るべきであろう。作家が自分自身を「鐘詰の中の一粒子のグリーンピース」と考え、他の人間との結

びつきを並存として把握するかぎり、この機械的な結びつきにたいして言葉は責任を取る必要がない。しかしもしも人間についての全体的な見方に立つなら、作家が状況によって全面的に条件づけられながら書くという行為によってその状況を指し示すものであることを認めるなら、書いた言葉についても書かなかった沈黙についても責任を問われることになる……であるとするれば作家の責任という第一のポイントは人間を全体として見る第二のポイントから必然的に出てくる帰結ということになる。

しかしながら、現実の過程として、この責任のモラルは人間についての認識から机上で導き出されたわけではなかった。「ドイツ軍による占領が、われわれに、われわれの責任を教えてくれた」⁽⁵⁾と、この文章の中で彼は簡潔に記している。この言葉にはくわしい説明を求めめるまでもなからう。一片の紙片がもっとも過激なテロ行為にも匹敵しうる圧縮された状況を想像しさえすればよい。対独協力をするヴィシー政府下にわずかながらも言論活動が誘惑として差し出されていただけに、一人一人の知識人にとって、言葉は良心のヤスリにかけて行使すべき道具として映ったに違いない。局外中立の言葉が存在す

る余地はなく、文字どおり「一つ一つの言葉がさまざまな反響を⁽⁶⁾持」ったのであろう。事実、戦後、対独協力をした作家やジャーナリストが次々と法廷に引きずり出され、言葉がもたらした現実の結果を身をもって支払わされることになった。ペンを握る者が軍人や政治家と同等の、場合によってはそれ以上の極刑を課された。なかでも四五年一月に行われたシャルル・モーラスとロベール・ブラジャックの裁判は(前者は辛うじて死刑を免かれ、後者は銃殺された。これに比して対独協力の最高責任者であるベタンの処刑は結局実施されなかった)占領下において書くことが死活にかかわる倫理の問題であったことをよく示している。

他方、全体的人間観について言うなら、たしかに戦前の哲学的著作(『想像力』、『情緒論粗描』)はいずれも、事実を分析してこれをいかに積みあげても綜合に達することは不可能である、という反省から出発している。いかにして一挙に総合的全体を把握するか、という方法意識に貫かれている。現象学にたいする熱烈な関心も、それが、〈分解しがたい全体的存在者〉としての人間現実にせまることが可能な方法、として彼の目に映じたからに

他ならなかった。また彼の文学世界においては心理分析がきびしく拒否されていた。登場人物の動作や行動は、常に〈意味するもの〉として、その人物の全体的試みを現わし出すように呈示されていた。とはいうものの、「紹介の辞」に提出されている〈状況—自由〉の考察は、やはり戦前の著作からはうかがえないものであるし、他方ポーヴォワールの回想録は、この問題が一九四〇年当時のサルトルの思索の中心にあったことを記録している。であるとすれば、全体的人間観の形成もまた、戦争—占領とは無縁ではないようである。

そこで、「紹介の辞」の中に明確な形で確認される〈アングジュマン〉の二つのモメントを、サルトルの戦後思想の出発点として見定めた上で、次に、戦争—占領とはサルトルにとって一体何であったか、その体験をあらためて問い直してみることしよう。それは〈アングジュマン〉の思想の成立に内側から光を与えることになるであろう。またこの作業をとおして、一九四五年の時点において語られた〈アングジュマン〉の位置、ならびに限界について、「紹介の辞」の読解からだけでは引き出せない若干の視点を得ることができかもしれない。

戦後サルトルは自分の〈戦争体験〉についてさまざまな反省をめぐらしている。エッセイ、インタヴューを通じての直接の発言もあれば、小説や戯曲の主人公を介しての間接の言及もある。だがその都度、〈戦争体験〉への照明のあて方は必ずしも一様ではない。そもそも第二次大戦はフランス人にたいしてのっぺりとした一つの顔を押しつけていたわけではなかった。ごく大ざっぱに外側から観察するだけでも、戦争の勃発―〈奇妙な戦争〉―敗戦―ドイツ軍による占領―パリ蜂起といった分節化が可能であるし、サルトルの場合にはそこに捕虜生活がはさまっていた。そのどれもが戦争の具体的な現われである以上、〈戦争体験〉もまた―それが反省の中で一つの全体を形作り、その後たえず生き直され、表現をとおして意味を変えていくことがあるにしても―これらの分節に沿って考えてみる必要がある。しかもこの場合、内側からこの体験を掘り出してこようというのであれば、戦後ある距離をおいて記された文章よりも、出来事のさなかで言葉にされた作品に問いかける方が望

ましい。さいわいに、と言うべきか、奇妙なことに、と付け足すべきか、戦争は彼に書く余暇を与えていた。『存在と無』、『自由への道』第一部と第二部、『バリオナ』、『蠅』、『出口なし』、これらがこの五年間のあいだに書きあげられた作品である。

(1) 大戦の勃発

一九三九年八月二十三日、独ソ不可侵条約を締結したドイツは、すぐにポーランドに侵攻の構えをみせた。これに対抗してフランス政府は九月一日に動員令を布告。翌日サルトルは東部戦線に近いナンシイにむかって出発する。以後約八カ月、戦火をまじえることのない、いわゆる〈奇妙な戦争〉が続き、その間サルトルはナンシイ郊外のブリュマットにとどまっていた。

大戦の勃発―動員をサルトルがどう受けとめたか。ポ―ヴォワールの回想録の中に見られる次の一節は、ある複雑な、あるいは曖昧な心境を物語っている。

「私は兵役についていた頃のサルトルの憤懣、無意味な軍規と時間の空費にたいする嫌悪を覚えていた。現在彼は、怒りを、いや苦々しい気持さえ抱くまいとしていた。(……)彼は愚知をこぼさずに入隊するつもりでい

る。でもその心の中ははり裂けそうに緊張しているのだ⁽⁷⁾。

つまり、この戦争をたとえば、帝国主義国家同士の間かな決闘として傍観をきめこむわけでもなく、またそうかといって、ファシズムにたいする民主主義勢力の闘いという明確な意味づけを持って受け容れているわけでもない。やむをえず引き立てられてゆく小羊の諦めに似ているようでしかし、消極的ながらも一種の決断を感じさせるのだ。

ところで小説家サルトルは、この両義的な意識を、『自由への道』の第二部『猶予』の主要なテーマとしている。マチウが動員されるのは一九三八年九月のミュンヘン会談直後、すなわちサルトル自身の動員よりも一年前に設定されており、また小説全体を通じてマチウは必ずしもサルトルではないが、この第二部の主題そのものがミュンヘン会談→戦争の勃発であるところから、動員をどう受けとめたかという一点においては作者が自分の体験を重ね合わせて書いている、と考えてまず間違いはあるまい。

動員を知ったときにマチウを襲った第一の感情は、自

分の過去の日々は盗み取られていた、平和な未来、平和のうちに予定された未来は贖の未来であり、それを目指して生きてきた過去の二十数年は贖の人生だった、という苦々しさである。だが、突如彼の喉元に襲いかかり彼の人生を台無しにしてしまったはずの動員にたいして、マチウはそれほどの嫌悪もそれほどの憤懣も覚えてはいない。いやむしろ、マチウの反応のうちには、まやかしの人生はこれで終わった、という晴れやかさすら感じとれる。この印象はさらに先へ行って確かめられる。兄のジャックに「お前は絶望しているんだ⁽⁸⁾」と言われたとき、マチウはきっぱりこれを否定する。ではなぜ彼は動員に応ずるのか。戦争になんらかの意味を与え、積極的にこれに参加をしていくわけではまったくない。ジャックの辛辣な皮肉を誘い出すことになるおおよそ説明にならない言葉しか彼は並べられないのだ。

「僕が発つのは他にしようがないからさ。だから、この戦争が正しいか正しくないか、僕にとっちゃ二義的な問題だ⁽⁸⁾」

つまりマチウにとって、まやかしの人生、贖の過去は「うしろに転げ落ちた⁽⁹⁾」としても、本当の人生、真の未

来がどの方向に開かれているのかはまだ見極められていないのである。しかし他方、マチウは自分のこの曖昧な決断を自分に納得させようとする。明確な言葉をこれに与えようとする。たとえば、駅のベンチに腰かけながら「戦争は病氣のようなものだから、病氣のように耐えてやろう⁽¹⁰⁾」と思ってみるマチウがそうだ。あるいは、スペイン内戦に加わったゴメスにたいし、「僕には何も失うものがないから、戦争に行くのがそれほど嫌じゃない。気分転換⁽¹¹⁾さ」と言うときのマチウがそうだ。とりわけ、バリへむかう汽車の中で、ラジオから聞こえてくるヒットラーの言葉とともに戦争の重圧をひしひしと感じながら、彼の生涯で初めて「理解を越えたもの」として姿を現わしたこの戦争をなんとかして見ようとするときのマチウがそうだ。戦争はいたるところにありながら、彼の目を、彼の手を逃れてゆく。だが突然彼はそれを垣間見る、「巨大な物体」、「一個の遊星」として。

「この遊星を真正面から見すえようとする、それは粉ごなに砕けてしまうだろう、いくつもの意識しかもうなくなるだろう。その一つ一つが、壁を、赤味がかかった葉巻の先っぽを、なじみの顔を眺めては、自分自身の責

任で自分の運命を組み立てている一億の自由な意識しか。しかしながら、もし人がこれらの意識の一つになるなら、気づきえないほどの軽い接触、感じられないほどのわずかな変化をとおして、自分が巨大な、目に見えないポリブ母体につながっていることに気づくだろう。戦争だ。各人は自由だが賭はなされている。戦争はそこにある、いたるところにある。戦争は俺の考えのすべて、ヒットラーの言葉のすべて、ゴメスの行為のすべて、それらの全体だ。しかし誰かがそこにおいて、総計をしているわけではない。全体は神にたいしてしか存在しない。だが神は存在しない。ところが戦争は存在するのだ⁽¹²⁾」

ここでは、戦争は未知の侵入者、突然の悪疫としてではなく、各人の行為と意識とから切り離すことのできない全体として垣間見られている。事件として身に蒙った戦争が、各人がその作者である、したがって引き受けねばならぬ運命として自覚されつつある。

この場面はほとんど知覚として描かれているが、これをマチウにおける「状況」の最初の発見として考えてよいだろう。たしかにこの程度のつながり―連帯の意識では、戦場への出発を正当化するのに十分ではない。作者

サルトルはすぐこの後で、バリに出たマチウに、夜のサン・ジェルマン・デ・プレの教会の尖塔を前にして透明な視線になりきったマチウに、「原因も、理由も、目的もなく、持続以外のいかなる過去もいかなる未来もなく、無償で、偶然で、壮麗な、絶対的なもの」の体験をさせている。あたかも、〈状況〉の意識にたいする最後の抵抗としてでもあるかのように。この絶対的自由の意識体験からするならば、あらゆる行為は等価となる。「出征することも、残ることも、逃亡することも」⁽¹⁴⁾、そして自殺することさえも。そしてそのかぎりでは、結局は戦場にむかうマチウの選択もいまだ消極的なままにとどまっている。彼は戦争を受け容れてはいるが、この戦争を彼の戦争としては要求していないのである。

おそらく作者は、マチウの〈状況〉の発見からヘアンガジュマンへの歩みの途上に、もう一つないし二つのクッションを置きたかったのであろう。敗戦―捕虜生活―占領という作者自身の体験をマチウにもくぐり抜けさせることによってマチウの〈ヘアンガジュマン〉を提示しなかったのであろう。ただ、降伏直前の戦闘でもう一度無償の行為を選んだマチウが行方不明になり(第三部

『魂の中の死』)、以後彼が再び舞台上に登場しないままに小説が未完に終ってしまったために、マチウにおける〈ヘアンガジュマン〉のテーマはこの小説の中では展開されないままに終わってしまったのである。

しかしながら現実のサルトルは、すでにこの時期に、マチウにみられる消極的な選択からもう一歩先に進んでいったようである。当初、諦めに似た気持から受け容れていた戦争を、積極的に引き受けるまでに姿勢(気持)を次第に転換していったようである。四〇年二月、一時的な休暇でバリに帰ってきたときのサルトルについて、ボーヴォワールは次のように書き留め、この時期にサルトルの思想には大きな変化が生じていた、と指摘している。

「サルトルは戦後のことをしきりに考えていた。彼は今後は政治の動きから遠ざかっているようなことはいと、固く決心していた。彼が原本性の概念にもとづいて築きあげ、実践に移そうと努力している新しいモラルは、人間が自己の〈状況〉をへ引き受けることを要求していた。そのための唯一の仕方は、一つの行動に自分をアンガジュさせる(s'engager)ことによって〈状況〉

を乗り越えることにあつた⁽¹⁵⁾

ここでボーヴォワールがサルトルの思想における重大な変化として簡潔に、巧みに要約している〈状況〉の〈引き受け〉という考えは、『存在と無』の第四部第一章、「自由と事実性——状況」と題された項でくわしく展開されている議論と正確に対応している。〈奇妙な戦争〉の期間サルトルは、勤務の時間を盗んで『存在と無』を書き続けていたというが、じっさい、戦争と結びつけられている思考が随所に見出される。とりわけ「自由と責任」と題された項で対自の責任が論じられる際に状況の例としてひかれるのは戦争そのものであり、また「私は、戦争に協力するか反対するかいづれかに自分をアングジェさせることによってしか状況のうちに戦争を発見することができない(……)」とか、「戦争を私の状況に統合することなしには、戦争の中に自分をそっくりアングジェさせることなしには(……)何一つ生きることができないのであるから(……)」⁽¹⁶⁾といった表現のうちに、〈アングジェマン〉という語の意味のエスカレーターを指摘しうるであろう。つまりそれまでは、対自存在が世界にかかわるときの基本的なあり方、あるいは状態

を示す語として用いられてきたのであるが、ここではそのもとの意味を保持しながら、同時に具体的な態度を示す語として、それも戦争を例として用いられているのである。sengager, engagement に、「〈自分を参加させる〉〈参加〉という訳語を与えうる最初のケースではなからうか。

ボーヴォワールの引用文に戻るなら、その数行先のところで、彼女は次のようにも記している

「彼の政治参加 (engagement politique) が正確には何から成り立つものかは、まだ彼にもわかっていなかった⁽¹⁷⁾」

politique という形容詞が当然のように付け加えられていることに注目しておこう。〈状況〉の〈引き受け〉、〈アングジェマン〉は何よりも政治として考えられているのである。

(2) 捕虜生活

四〇年五月十日、ドイツ軍はオランダ、ベルギーに侵入し、これに対抗した英仏両軍とのあいだに全面戦争が開始される。それから五週間後の六月十七日、フランス政府はあつげなく〈戦闘停止〉を命じ、新たに組織され

たベタン内閣によって二十一日停戦協定が結ばれる。以後フランス国内はドイツ軍が直接管理する占領地帯と、ヴィシーに本拠を移したベタン政府の治める非占領地帯とに分割された。

その間サルトルは、六月二十一日ロレーヌ州バドゥーでドイツ軍の捕虜となり、始めはナンシー郊外の自動車ガレージに收容され、二カ月後トレヴィヴの收容所に移された。以後ここで約七カ月の捕虜生活を送ることになる。

この捕虜体験の重要性については、後にサルトルは何か口になっている。たとえばよく引用されるのは、「あなたがアンガジュマンの文学に回心された契機は、やはり戦争体験に帰すべきですか」という問いにたいする次のような答え。「そうです(……) 決定的な体験は捕虜体験でした。有刺鉄線の囲いの中(18)でこそ、真の自由とは何であるかを自覚したのですから」

ここで彼は真の自由とは何かを細かに語っていないが、この答えの横に、「われわれはドイツの占領下にあったときほど自由であったことはなかった」という一句で始まる「沈黙の共和国」という文章を置いてみると、彼が

真の自由を〈拘束〉と結びつけて考えていることは明らかである。そして、捕虜收容所という全員に共通の閉じられた世界を想像するなら、この〈拘束〉として押しつけられた〈状況〉の中の自己の〈選択〉、また〈選択〉に伴う他人への〈責任〉、という形で真の自由が自覚され、〈アンガジュマン〉という言葉がその個々の意味を獲得していく筋道が容易に了解されるはずである。

しかし、捕虜生活の体験を考えるさいに、私がおっとも注目したいのは、收容所の中で書かれた戯曲『バリオナ』である。これは、せめてクリスマスだけは楽しくすごそうと提唱した一司祭の求めに応じて四〇年の暮に收容所の中で書かれた作品で、クリスマス当日に捕虜仲間によって演じられ、サルトル自身その演出にあたり、また劇中の一人物バルタザールの役を演じたという。未訳の作品であるので梗概をざっと紹介しよう。(20)

戯曲は中世の聖史劇ミステルの形式をとり、キリストの降誕の前夜、ローマの圧制下にあるユダヤの一寒村が舞台である。

この村にローマの監督官レリウスが訪れ、人頭税の引き上げを通告する。青年村長のバリオナはこれに抵抗す

るが空しい(第一幕)。村民大会が開かれ、そこでバリオナは、今回だけは税の引き上げを認めるが、「やがて誰一人として税を支払うものがいなくなるように」、村人はこれ以後絶対に子供を産まぬことを提案し、神の前でこれを誓わせる。だが、誓いがまさになされた瞬間、妻のサラが現われ、バリオナの子供を宿したことを伝える。誓いを守らせようとするバリオナと、子供の生命を守ろうとするサラ、さらにローマの発展の立場から子供を産ませようとするレリウスのやりとりがあった後に、最後にバリオナは、夜明け前に「子供を産むべし」の神の意志が現われたなら誓いを撤回することを約束する(第二幕)。村の羊飼いの前に天使が姿を現わし、ベツレヘムに「ヘメシア」が誕生したことを告げる(第三幕)。村人は良き報を告げる羊飼いたちに和して希望の歌を歌う。だがバリオナの目には、この村人たちは信じやすい愚民としか映らない。彼は「この世においては一切が転落である」という絶望の哲学を説き、その雄弁によって村人の希望の幻想を打ち破ったかに見える。だがそのとき、東方の三博士がキリストの誕生を祝いにベツレヘムにかけつけ、その姿を見て村人は一転してバリオナに不

信の念をいだし、バリオナの制止を振り切って東方の三博士に従いベツレヘムへむかう。サラもまたこの群に加わっていく(第四幕)。ひとり残されたバリオナは、魔法使いに「ヘメシア」の運命を占ってもらったところ、「メシアは幾つかの奇蹟を行うだけで、三十三歳で十字架にさらされて死ぬであろう」という予言が返ってくる。ユダヤ人が待望していた闘う兵士ではなく、諦めを説く小羊にすぎないこの「ヘメシア」にバリオナは立腹する。もしもこれが本当に「ヘメシア」ならば、ただでさえ消えかかっているユダヤ人の反抗の炎がまったく失われてしまふであらう。そこでバリオナはキリストの殺害を思い立って、先まわりをしてベツレヘムにかけつける(第五幕)。短刀をひそめて馬小屋に忍び入ったバリオナは、そこで、赤児にそそがれるヨセフのまなざしを見て立ちすくみ、キリスト殺害を思いとどまる。群衆がかけつけ、馬小屋の周囲は祭の場となる(第六幕)。ローマ人がキリストの命を狙いに来るといふ報が伝えられ、人々の不安、絶望がつゆる。それにつれて村人たちはバリオナのところへ戻ってくる。その信仰の薄さをバリオナは叱りみずからキリストを落ちのびさせるための闘いの先頭に

立つ(第七幕)。

この芝居の面白味はどちらかと言えば、パリオナとその他の人物、ローマからの監督官で同時に老練な外交官でもあるレリウス、キリストの地上到来の意味を「人間にその超越を示すため」と説くバルタザール、誓いにそむいてまで子供を産むことを主張するサラ、などとの対話の中にある。しかし、芝居の意味という点から言えば、六幕と七幕におけるパリオナの選択と、その選択の根拠が重要であろう。パリオナにキリストの殺害を思いとどまらせる箇所は、次のような独白をおしてなされている。

パリオナ——(……) 女は俺に背を向けていて、赤児の姿は見えない。女の膝の上にいるのだろう。だが男の姿は見える。天使の言ったとおりだ、なんと激しく女を見ていることか！ なんと目で！ あの二つの澄んだ目のうしろに、穏やかで穿たれたあの顔の中、二つの欠如のように澄んだ目のうしろに、一体何がありうるのか？ どんな希望がありうるのか？ 俺たちはといえは希望の側にはいない。それでもしあの男が、赤児をしめ殺す俺の姿を見たならば、どんな恐怖の雲があいつの奥

底から湧き上がり、あのからの二つの点を曇らせることになるだろうか。よし、あの赤児を俺は見なかった。だが俺にはすでにわかっている。あの子に手は触れまい。指のあいだであの幼い生命の火を消す勇氣を持つためには、父親の目の奥でまずその姿を見てしまっただけならなかったのだ」⁽²¹⁾

男のまなざしに映るもの、言うまでもなくそれは一人の父親の希望である。その希望を前にしてパリオナはたじろぐ。この段階で彼は生まれてきた子供が「ヘメシア」だなどとはまったく信じていない。彼は赤児を見さえもしなかった。彼はいぜんとして懷疑の黒い虫である。けれども、ひとり物かげにたたずんで、人びとの喜びの歌、喜びの祈りを耳にしているうちに、一人の父親の希望が人びとすべてによって、地上に平和を求める虐げられた一族によって、さらに妻のサラによって分け持たれていることを知る。それと共に、彼らの暁にたいして、光への渴望にたいして、自分の闇を、絶望の真理を説く気になれなくなってくる。拒否にこりかたまった自尊心が一挙に打ち崩されるかに見える。とりわけ三博士の一人バルタザールから、キリスト到来の意味を聞かされたら

きには、馬小屋の中に入り人びとと共にキリストの前に
跪く一歩手前までいく……

バリオナは最後に「ヘメシア」を信じたのだろうか。戦
闘決意をしたバリオナが村人たちに犠牲を説く言葉から
すると、彼は信じているかに見える（「俺は今ではお前
たちのキリストを信じている」²²）。だがこの点は曖昧なま
まにされていると見るべきであろう。バリオナが馬小屋
に入って跪く前に、人びとがバリオナの方に向かってきて
ローマ人の追手のことを語り始めるのであるから。おそ
らくこの曖昧さは意図的なものであろう。作者はここで、
神を信ずる者も神を信じない者も団結をする必要のあつ
た捕虜收容所という特殊条件を考慮に入れていようように
思われるのだ。いづれにせよバリオナにとって重要なこ
とは、赤児が「ヘメシア」であるか否かではなく、彼が民
衆の希望を一身に担って生まれてきたという事実であり、
彼が最後に賭けたのは、ヨセフ—民衆—妻という他者の
希望、またそれをおして初めて得られたかみ見える自
分の生の意味を救うためであった。

バリオナの選択を以上のように解釈してくると、マチ
ウとの相違は決定的である。マチウの場合には、動員を

受け容れたときにこうした意味での他者は存在しなかつ
た。また『自由への道』の第三部『魂の中の死』におい
ては、一九四〇年六月十五日から十八日にかけてのフラ
ンス軍隊の崩壊の様相が前景に出され、ドイツ軍の進撃
を食い止めるための殿部隊に加わるマチウに再び照明が
合わされるが、共に全滅するかもしれないこの戦闘にお
いてさえ、彼はひとりである。彼が最後に残すのは、象
徴的なことに、「俺は純粹だ、全能だ、自由だ」²³という
内的モノローグなのである。それは、サン・ジェルマン
・デ・プレの教会の尖塔に視線を釘づけにしているとき
のマチウの意識と等質である。一方が「事物」の上に炸
裂する意識、他方が「行動」の中の意識であるという相
違があるにしても。

以上の考察から私は、『バリオナ』をとおしてうかが
える收容所体験の重要さを、現実の他者の発見、という
ふうに言い表わしてみよう。共通の状況下に共通の拘束
を受けながら、絶望と希望を分け持ったという体験であ
る²⁴。それは、同じ集団生活であるにもかかわらず、敗戦
にいたるまでの軍隊生活の中からは——すくなくとも作
品を分析するかぎり——読み取りえないものなのである。

(47) サルトルの政治思想(一)

ところで、バリオナがローマ軍への抵抗を決意する最後の場面は、レジスタンスへの呼びかけであり、観客―捕虜たちもそのように受けとめた⁽²⁵⁾という。しかし、よく考えてみればこれは奇妙な呼びかけであり、受けとめ方である。なぜなら、ローマからの追手を食い止めようとするこの戦いに勝つ可能性はまったくなく、彼らを待ち受けているのは絶滅の運命なのだから。しかしまた考えようによれば、この奇妙さこそ、当時のサルトルと彼の捕虜仲間の置かれていた位置を正確に示しているとも言える。レジスタンスは彼らにとって、当然のことではあるが、観念にすぎなかったのである。なぜなら、この時点においてはレジスタンスは本当に全滅を覚悟せねばならなかったはずで、もしそのことを知っていたらサルトルはこのような結末をもってレジスタンスへの呼びかけとすることはできなかつたであろうし、観客にしても単純に感動してもらえなかつたであろうから。(後に、占領下に書かれ、上演された『蠅』とこの点対照的である。)ただここで一つ確認しておくべきことは、收容所内のサルトルにとって、〈アンガジュマン〉の意味内容は明確であった、ということである。〈アンガジュマン〉

とは直接にレジスタンスであり、やや広くは〈政治参加〉であった。しかしながら、收容所を出た後のドイツ軍占領下での体験は、この生まれたての〈アンガジュマン〉の概念を屈折させ、これを〈政治参加〉の訳語に閉じこめえぬ多義的な言葉とすることになるであろう。

- (1) Maurice Merleau-Ponty, *Pour la Vérité*, 1945, in: *Sens et non-sens*, p. 299.
- (2) Jean-Paul Sartre, *Présentation des Temps Modernes*, 1945, in: *Situations*, II, p. 13.
- (3) *Ibid.* p. 18.
- (4) *Ibid.* p. 22.
- (5) *Ibid.* p. 13.
- (6) *Ibid.* p. 13.
- (7) Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, p. 389.
- (8) Jean-Paul Sartre, *Le Sursis*, p. 87.
- (9) 「一本の糸でしかもう彼にうながって、なかつた何か切り離され、かたまりとなって後に転げ落ちた。それは彼の人生だった」
(*Ibid.* p. 71.)
- (10) *Ibid.* p. 206.
- (11) *Ibid.* p. 212.
- (12) *Ibid.* pp. 257—258.
- (13) *Ibid.* p. 277.

- (14) Ibid. p. 286.
- (15) La force de l'âge, p. 442.
- (16) L'Être et le Néant, p.p. 640—641.
- (17) La force de l'âge, p. 442.
- (18) Rencontre avec Jean-Paul Sartre, interview par Gabriel d'Aubarède (Les Nouvelles Littéraires, 1^{er} février, 1951.)
- (19) La République du silence, 1944, in: Situations, III, p. 11.
- (20) Bariona, ou le Fils du tonnerre, 1940, in: Les Ecrits de Sartre.
- (21) Ibid. p. 620.
- (22) Ibid. p. 630.
- (23) La mort dans l'âme, p. 197.
- (24) 収容所における他者の発見は、もう少し肉体的な次元にまでおりて考える必要があるかもしれぬ。捕虜たちが分け持ったのは、まず何よりも、狭い空間であったのだから。ジャロメッティの絵画空間について書いた文の中で、サルトルはこのときの齟齬状態の生活を、むしろなつかしそうに語っている。「私は鬮の籠詰と言ってもいいような捕虜収容所で二ヶ月間すごして来ていた。そしてそこで、絶対的近接の体験をしていた。私の生活空間の境界は私の皮膚だった。昼も夜も肩とか腹とかの暖みが自分にくっついてくるのを感じていた。それは別に気づきまりではなかった。他人とは、これまたわたしだったのだから」
(Les peintures de Giacometti, 1954, in: Situations, IV, p. 348.)
- 同じく『言葉』の中で、子供のころ映画館にいる群衆が好きだったことを語りながら、儀式を抜きにした裸の状態での人間の結びつきを、「各人の万人にたいする距離なき現存」を再発見したのは捕虜収容所においてだった、と記していることにも注目しておこう。
(Les Mots, p. 99.)
- (25) La force de l'âge, p. 499. (一橋大学助教授)